

問1	邪馬台国の女王卑弥呼に関する記述として、最も適当なものはどれか。（2016年 北海道公立入試 類似）			
	1. 夫である天皇の死後、軍を率いて朝鮮半島へ出兵したという伝説がある。	2. 魏に使いを送り、「親魏倭王」の称号や多数の銅鏡を授かった。	3. 摂政である聖徳太子とともに、冠位十二階や十七条の憲法を定めた。	4. 日本で初めて本格的な都城である藤原京を造営し、国家体制を整えた。
問2	3世紀の倭（日本）において、邪馬台国の女王である卑弥呼が中国の魏へ使節を送った際、皇帝から授かったとされる称号と、その証として贈られたものの組み合わせとして適切なものはどれですか。（2019年 広島県公立入試 類似）			
	1. 大王の称号と、鉄製の武器や農具	2. 親魏倭王の称号と、金印や百枚の銅鏡	3. 倭王の称号と、仏教の経典や寺院の設計図	4. 漢委奴国王の称号と、金印
問3	弥生時代に使用された青銅器である「銅鐸」の変化や、当時の社会における役割について説明した文として、最も適切なものを次の中から選びなさい。（2020年 山口県公立入試 類似）			
	1. 当初は内部に「舌（ぜつ）」を吊るして音を鳴らす楽器として使われたが、次第に大型化し、豊作を祈る儀式で飾るための道具へと変化した。	2. 大陸の王朝から日本の王に授けられたもので、金印とともに当時の日本が中国の皇帝に認められていたことを示す外交上の重要な証拠となった。	3. もともとは実戦で使うための鋭い刃を持つ武器であったが、次第に大型で薄い形状になり、首長の権威を示すための宝物として扱われるようになった。	4. 死者の霊を守るためや王の権力を誇示するために、古墳の表面に並べられた土製の焼き物として、全国各地の有力な豪族の間で広まった。
問4	弥生時代における金属器の使用について、青銅器と鉄器の使い分けに関する説明として最も適切なものはどれか。（2022年 島根県公立入試 類似）			
	1. 青銅器は主に祭祀の儀式用に用いられ、鉄器は農具や武器として実用的に用いられた	2. 青銅器は主に調理や貯蔵の容器として用いられ、鉄器は祭礼の装飾品として用いられた	3. 青銅器は一部の特権階級の家財として用いられ、鉄器は庶民の狩猟道具として広く普及した	4. 青銅器は大陸との交易における貨幣として用いられ、鉄器は建築用の釘として用いられた
問5	邪馬台国の女王が中国の魏の皇帝に使者を送った際、皇帝から授けられたとされる称号と、その証として贈られた品物の組み合わせとして適切なものを選びなさい。（2025年 長野県公立入試 類似）			
	1. 「漢委奴国王」の称号と、志賀島で発見された金印	2. 「日本国王」の称号と、明との貿易に用いられた勘合符	3. 「親魏倭王」の称号と、金印や銅鏡	4. 「倭王」の称号と、百済から贈られた七支刀
問6	弥生時代の社会の変化について述べた文として、当時の集落のあり方や道具の特徴を正しく説明しているものはどれですか。（2024年 沖縄県公立入試 類似）			
	1. 竪穴住居が並ぶ大規模な集落が形成されたが、外敵を防ぐための堀などは作られなかった。	2. 仏教の伝来とともに巨大な前方後円墳が造られ、集落の形が大きく変化した。	3. 縄目の文様がある厚手で黒褐色の土器を使用し、主に狩りや採集を行って生活した。	4. 集落の周りに堀や柵を巡らせ、薄くて硬い土器や鉄器・青銅器などの金属器を使用した。
問7	弥生時代の遺跡から出土する銅剣や銅鐸（どうたく）などの青銅器について、日本における当時の主な使用目的を説明したものとして最も適切なものはどれですか。（2021年 佐賀県公立入試 類似）			
	1. 戦場において敵を攻撃したり身を守ったりする実戦用の武器として使われた	2. 大陸との交易において支払いに用いられる、価値の基準となる貨幣として使われた	3. 木を切り倒したり土を掘り起こしたりするための農具として使われた	4. 集落の祭祀（さいし）や儀式において用いられる祭りの道具として使われた
問8	弥生時代に始まった、青銅器と鉄器の使い分けに関する背景について、正しい説明はどれですか。（2026年 北海道公立入試 類似）			
	1. 青銅は鉄よりも耐久性に優れていたため、大規模な土木工事の道具としてのみ使われた	2. 石器から鉄器への移行を嫌った指導者たちが、妥協案として青銅器を儀式に導入した	3. 鉄器が実用的な武器や工具に用いられる一方で、青銅器は主に集団をまとめるための祭礼や権威の象徴に特化していった	4. 青銅器は弥生時代の中頃に全て回収され、その原料はすべて鉄器の製造に再利用された
問9	弥生時代に現れた環濠集落は、それ以前の縄文時代の集落とは大きく異なる社会背景を持っています。このような形態の集落が全国的に出現した理由として、最も適切な説明はどれですか。（2021年 愛知県公立入試 類似）			
	1. 大陸との交易で得た貴重な青銅器や鉄器を、雨風や火災から物理的に保護する必要が生じたため	2. 渡来人から伝わった仏教の寺院を建立するにあたり、聖域と世俗の居住区を明確に区別するため	3. 稲作による生産力の向上で蓄えが生まれた結果、土地や水をめぐる集団間の争いが激化したため	4. 大規模な洪水被害から住居を守るために、集落の周囲に巨大な排水路を設ける必要があったため
問10	弥生時代に作られた青銅器のうち、釣鐘のような形をしており、表面に流水などの幾何学模様が施されている祭祀の道具を何というか。（2026年 新潟県公立入試 類似）			
	1. 銅鏡	2. 銅剣	3. 銅鐸	4. 石包丁
問11	3世紀に邪馬台国の卑弥呼が、中国の魏へ使節を送り「親魏倭王」の称号や銅鏡などを得た背景について、当時の日本の状況を踏まえた説明として正しいものはどれですか。（2021年 茨城県公立入試 類似）			
	1. 魏の軍事力を直接日本に呼び寄せ、反対勢力を武力で一掃して一気に領土を拡大しようとしたため	2. 国内の諸勢力が争う中で、中国という大国の後盾を得ることで自らの権威を高める必要があったため	3. 中国が日本に対して朝貢を強制し、従わない場合は貿易を禁止すると通告してきたため	4. 日本の優れた絹織物を中国全土に普及させ、大陸での市場独占権を皇帝に認めてもらうため
問12	弥生時代に製作された青銅器の一種で、兵庫県の五十六点や島根県の五十四点をはじめ、滋賀県や和歌山県といった近畿地方の府県で多くの出土が確認されている、豊作を祈るなどの祭礼に用いられた道具を何というか。（2024年 京都府公立入試 類似）			
	1. 勾玉	2. 石包丁	3. 銅鐸	4. 銅矛
問13	紀元前後の日本（倭）が100余りの小国に分かれていた時代、現在の福岡県付近にあった「奴国」の王が使者を派遣し、皇帝から「漢委奴国王」と刻まれた金印を授けられたとされる中国の王朝を選びなさい。（2016年 大阪府公立入試 類似）			
	1. 宋	2. 元	3. 唐	4. 漢

答え合わせ・解説

問1	答え 2 魏に使いを送り、「親魏倭王」の称号や多数の銅鏡を授かった。	『魏志』倭人伝には、卑弥呼が239年に魏へ使いを送り、その返礼として金印や銅鏡100枚を与えられたと記されています。他の選択肢は、それぞれ推古天皇、持統天皇、神功皇后に関連する内容であり、卑弥呼の事績ではありません。
問2	答え 2 親魏倭王の称号と、金印や百枚の銅鏡	卑弥呼は239年に中国の魏へ使節を派遣しました。当時の中国は魏・呉・蜀が並立する三国時代であり、卑弥呼は北方の魏と結ぶことで外交的な後ろ盾を得ようとしていました。魏の皇帝はこれに応え、「親魏倭王」の称号とともに、その権威を象徴する金印や、当時の日本列島では希少だった銅鏡などを授けました。
問3	答え 1 当初は内部に「舌（ぜつ）」を吊るして音を鳴らす楽器として使われたが、次第に大型化し、豊作を祈る儀式で飾るための道具へと変化した。	銅鐸は、古い段階のものは小型で、中に「舌」と呼ばれる棒を吊るして振り、音を鳴らして使われていた痕跡があります。しかし、時代が下るにつれて急激に大型化し、表面にシカやカマキリ、高床倉庫などの精巧な絵画が描かれるようになるなど、音を鳴らす道具から、儀式の際に見せるための祭祀具へと役割が変化していきました。武器から祭祀具に変化したのは銅剣や銅矛の説明であり、土製の焼き物は埴輪、中国皇帝からの授与品は金印や一部の銅鏡（卑弥呼の鏡など）を指します。
問4	答え 1 青銅器は主に祭祀の儀式用に用いられ、鉄器は農具や武器として実用的に用いられた	弥生時代の大きな特徴は、青銅器と鉄器という性質の異なる二つの金属器が並行して使われていた点にあります。青銅器は脆（もろ）いため、主に祭りや儀式を司るための祭礼具として発展しました。一方、鉄器は硬くて鋭いため、木製農具を加工するための工具や、実際の武器、耕作のための農具として実利的な目的で活用されました。
問5	答え 3 「親魏倭王」の称号と、金印や銅鏡	卑弥呼は魏の皇帝から「魏に親しい倭の王」を意味する「親魏倭王」の称号を授かりました。その際、権威を象徴する品として金印や100枚の銅鏡などが贈られ、これらを利用して国内の統治を有利に進めようとしたと考えられています。なお、「漢委奴国王」の金印は1世紀（後漢の時代）の出来事です。
問6	答え 4 集落の周りに堀や柵を巡らせ、薄くて硬い土器や鉄器・青銅器などの金属器を使用した。	弥生時代は、稲作の普及に伴い金属器（鉄器・青銅器）や、縄文土器に比べて薄くて硬い弥生土器が使われ始めました。社会構造の変化により、争いから身を守るための環濠集落が築かれたのがこの時期の大きな特徴です。縄目の文様がある土器や、防御施設のない大規模集落（三内丸山遺跡など）は主に縄文時代の特徴です。
問7	答え 4 集落の祭祀（さいし）や儀式において用いられる祭りの道具として使われた	大陸から日本列島へ伝わった青銅器は、その多くが実用性を超えて大型化したり、非常に薄く作られたりする傾向がありました。これは、実際に物を切る・突くといった武器としての用途よりも、集落の豊作を祈る儀式や、共同体の団結を確認するための祭事において、富や権威を象徴する「祭器（さいき）」として重宝されたことを示しています。
問8	答え 3 鉄器が実用的な武器や工具に用いられる一方で、青銅器は主に集団をまとめるための祭礼や権威の象徴に特化していった	弥生時代の日本において、金属器は「実用の鉄」と「祭祀の青銅」という二面的な使い分けがなされていました。稲作の普及に伴って集団が大きくなると、人々をまとめ上げるための儀式や、その集団の頂点に立つ指導者の権威が必要となりました。そのため、美しく加工しやすい青銅器は、実用性よりも、見る人を圧倒するような象徴的な価値を求められるようになったのが大きな背景です。
問9	答え 3 稲作による生産力の向上で蓄えが生まれた結果、土地や水をめぐる集団間の争いが激化したため	本格的な稲作の開始は、人々に安定した食料をもたらしましたが、同時に「富の蓄積」と「貧富の差」を生み出しました。これにより、条件の良い耕作地や農業用水を独占しようとする集団同士の対立（戦争）が始まりました。自分の集落を守るために防御機能を備える必要があったことが、環濠集落が普及した最大の背景です。
問10	答え 3 銅鐸	弥生時代には大陸から金属器の技術が伝わり、青銅器と鉄器がほぼ同時に使われ始めました。青銅器のうち、釣鐘の形をした銅鐸は、主に近畿地方を中心に分布しており、豊作を祈るための祭りの道具として用いられたと考えられています。
問11	答え 2 国内の諸勢力が争う中で、中国という大国の後ろ盾を得ることで自らの権威を高める必要があったため	当時の日本（倭）は、多くの小国が対立し合う「倭国大乱」を経て、女王卑弥呼による連合体である邪馬台国が形成された時期でした。依然として国内には対立勢力が存在していたため、卑弥呼は圧倒的な文化と武力を持つ魏の皇帝から「倭王」として認められることで、自らの統治能力と地位を盤石にしようと考えました。
問12	答え 3 銅鐸	弥生時代には、大陸から青銅器の技術が伝わり、日本では主に祭りの道具として独自に発展した。銅鐸は近畿地方を中心に、四国や中国地方からも多く発見されており、稲作の豊作を願う儀式などで使われたと考えられている。選択肢にある銅矛も青銅器だが、これらは九州地方を中心に多く出土する傾向がある。
問13	答え 4 漢	紀元前1世紀ごろ、倭（日本）は100余りの国に分かれていました。1世紀半ば（紀元57年）には、その中の一つである奴国の王が中国の王朝である漢（後漢）に使者を送り、皇帝（光武帝）から金印を授かりました。この事実は中国の歴史書である『後漢書』東夷伝に記録されています。